別紙様式３（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　名　廖　莉平

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

陶晶孫研究――九州時代を中心に――

論文要旨（別様に記載すること）

（注）１．論文要旨は、A4版とする。

２．和文の場合は、４０００字から８０００字程度、外国語の場合は、２０００語から４０００語程度とする。

３．「論文要旨」は、フロッピーディスク（１枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

陶晶孫研究——九州時代を中心に
論文要旨

廖　莉平

拙論は序論に相当する〈はじめに〉の部分、結論に相当する〈結び〉の部分と、第一章から第五章まで本論に相当する部分によって構成されている。

〈はじめに〉の部分では、本研究で取り上げる陶晶孫の九州時代に関するこれまでの先行研究をまとめ、本研究の背景、研究目的及び研究方法について述べた。

第一章では、従来全く関心を示されてこなかった「木犀」の元来のタイトルである「Croire en destinée」(「運命を信じる」)に光を当て、〈運命〉という視点から同じ九州時代に描かれた短篇小説「木犀」と「洋娃娃」との関連性について考察した。

「Croire en destinée」はそのタイトルが示すように、〈運命〉をめぐる問題を取り上げている。本章では作品における〈運命〉の意味合いを考察する前に、まず、陶晶孫本人における運命の位置づけについて考察を行った。分析結果によれば、長男として果たさなければならない責任を常に意識しており、〈運命〉に対する無力感を抱きつつ、同時に、〈運命〉と戦うという思いを振り捨てることができなかった陶晶孫は「Croire en destinée」を創作したのである。次に作品における運命の意味について考察を行うために、九州時代における作品の中で同じく運命という言葉が現れている「洋娃娃」と比較対照してみた。両作品に用いられる〈運命〉という言葉は何れも教師から生徒に語られているという共通点があるほか、両作品には様々な類似点を見出すことができた。それらによれば、「洋娃娃」は「木犀」の延長線上にある作品であり、両作品は〈運命〉というテーマを鎖のように意図的に繋げて創作したものであることが分かった。

本章の最後では、陶晶孫が〈運命〉という題材に興味を持ったのは、これまで述べてきた彼にまつわる〈運命〉に共鳴できる様々な事件のみならず、当時彼を取り巻く日本の文壇情況と、彼が参加した九州帝国大学のフィルハーモーニーからの影響も無視できないことを指摘した。

第二章では、前半部分は黒衣人のみからみられる〈死の賛美〉という従来の「黒衣人」の読みとは視点を変え、黒衣人と弟 Tett 二人の関係に注目しつつ作品を読み直して分析した。後半部分は、「黒衣人」と外国文学との関連性に触れつつ創作動機を探ってみた。

まず、戯曲「黒衣人」を六つの場景に分け、その場景毎に現れる回想と現在

に関する出来事を一覧表にした。その表によって、回想の場面では黒衣人の大人への嫌悪感を示すのに対して、現実の場面では弟 Tett の心理変化を仄めかしつつ、二人の一体感に結び付けられていくことが分った。次に、主人公各々の過去の出来事を整理した略表を通して、二人が似通った幾つもの経験をしていることが分った。その重なっている部分こそ、これまで述べてきた二人の一体感をもたらした遠因であり、Tett のほうに空欄が残っているのは、これから成長していく過程のなかで、黒衣人の欄にすでに書き込まれているような出来事にやがて遭遇していくことを暗示しているからである。これによりなぜ自分の手で Tett を銃殺し、そして自ら命を絶たなければならなかったのかという黒衣人の行動が明らかになった。

続いて、「黒衣人」とメーテルリンクの「闖入者」との関係について、両作品の内容、タイトルなど、五つの側面から両作品を具体的に比較分析した。それによって、従来の「黒衣人」研究においては、象徴手法がメーテルリンクと相似していることしか強調されてこなかったが、実は「黒衣人」は象徴手法にとどまらず、全体を通してメーテルリンクの「闖入者」から並々ならぬ影響を受けていることが分った。

第三章では、「剪春蘿」を通して医者と文学者の両面性を持つ陶晶孫が自分の作品の中に如何に両者を共存させたのかを解明すると同時に、〈夢〉という視点から「剪春蘿」と同時代の郭沫若の「残春」とを比較検討した。

作品の終盤に突然に現れる〈川に落ちた夢〉の出所を見つけ出すことを手がかりに、フロイト夢解釈と関連づけ、夢を見る主体である〈葉〉と、夢の中に出てくる客体である〈緑〉との関係を明らかにした。それによって、自分を取り囲んでいる現実の環境と自分の成長により〈緑〉との愛がいつか阻害されるのではないかと心配する〈葉〉は、無意識に不吉な夢をみてしまったことが分る。一方、〈葉〉における夢と現実との関係を明らかにすることによって、当時医学生であった陶晶孫が、身につけた医学知識を自分の作品に生かそうとした彼の創作意図を窺い知ることもできた。

また、同じ夢というテーマを用いた郭沫若の「残春」と比較することで、モチーフは同じでありながら、作品における現実と夢が極端に対立する「残春」と、現実と夢が一致する「剪春蘿」という両作品の違いを指摘した上で、「残春」から暗示を得ていたと見られる「剪春蘿」は郭沫若より遥かに巧妙な形で〈夢〉を作中に生かしていることを指摘した。

第四章では、戯曲「尼庵」に見られる兄妹の恋愛観と、当時の日本で恋愛ブームを巻き起こした厨川白村の『近代の恋愛観』との関係を論じることを通して、九州時代における陶晶孫の恋愛観を探ってみた。

作品における兄の〈性は人生の総てじゃない、愛こそ人生の根本だ〉という恋愛観は、『近代の恋愛観』を貫く精神〈love is best〉と類似しており、妹の

恋愛観は、兄たちのような大人、特に男の立場に立ってしか論じられていない恋愛観ではなく、純粋で無垢の愛を求めているものであることが、作品に沿いつつ分析することを通して明らかにできた。従来の〈兄＝陶晶孫〉という紋切り型の研究に対して、〈兄＝厨川白村〉・〈妹＝陶晶孫〉という新たな読みを提示することができた。

第一章から第四章までにおいては九州時代に書かれた五篇の作品を取り上げて詳細に分析を行い、何れの作品にも九州にいた陶晶孫の当時の思念――大人世界に対する嫌悪感と子供世界に対する憧憬――が潜んでいることを明らかにした。このような思念を作品に描く際に、陶晶孫は科学者の視点からフロイトの夢解釈の理論を援用したり、科学実験のようにあらゆる禁断の恋愛のパターンを設定したりして、作品の構成に工夫を凝らしている。更に、九州時代の作品と同時代の文学・評論との対照関係の考察を通して、陶晶孫は周囲の文化状況に関心を持たずに創作をしたのではなく、むしろ、同時代の息吹きに敏感に反応しながらそれらに対する思いを作品に取り込んだことが分った。

九州時代にみられる様々なタブーの愛はそれ以後の作品の中から一切みることができない。このような違いが何故生じたのだろうか。本稿の第五章では、〈放浪〉というキーワードから九州時代とそれ以後の作品との相違をもたらした根源を探り、日本留学時代における陶晶孫文学をどのように時期区分にすべきかを検討した。

まず、日本留学時代にみられる〈放浪〉という言葉の用いられた作品を取り出し、これらの使用状況について分析を加えた。これによれば、九州時代以後のある時期から、日中における〈放浪〉の意味の違いに気付いた陶晶孫は、日本語の〈放浪〉のかわりに、〈彷徨う〉という意味を表す中国語として〈漂流〉・〈漂泊〉・〈流浪〉を使い始めたが、これまで好んできた〈放浪〉に対する関心は一向に変わりが無いことが分った。

続いて、日本留学時代の作品を九州時代とそれ以後の作品とに分け、両者における〈放浪〉の意味合いを具体的に分析した。九州時代にみられる〈放浪〉は、九州の地方都市に流れてきた陶晶孫がこれまで生活してきた東京に憧れ、現実から逃避するためにどこかに逃げ出したいという彷徨う意味を持つものである。一方、九州時代以後の作品にみられる〈放浪〉は、日中両国の狭間に立たされた陶晶孫が両国の間を彷徨う意味を持つものである。両者の違いは関東大震災からもたらされたものと指摘する小崎氏に異論を唱え、当時の陶晶孫を取り巻く社会環境及び一身上の思いからもたらされてきたものであることを述べた。従って、陶晶孫文学における境界線は九州時代に画すべきであることを指摘した。

最後の〈結び〉の部分では、以上述べてきたことをまとめながら、これまで中国現代文学史における陶晶孫の位置の見直しを主張した。